我が日本民族をキリストへ

日本民族総福音化運動協議会

Movement of Evangelizing All Japanese

第51号

日本民族に聖霊の力により キリストを信じる 大きなリバイバルが起きる！

日本民族総福音化運動協議会　理事
東京ブロック長
新宿福興教会　牧師
菅野　直基

20年以上に渡り、元総裁の奥山実先生、前総裁の手束正昭先生により、日本民族総福音化運動協議会が導かれ、私も参加させていただきました。奥山先生はブレることなく会をけん引してくださいました。私に対しても、「よくやっていますね。がんばっていますね。すごいですね」などと、いつも励ましてくださいました。奥山先生が定年で退任された後は、手束先生が総裁となられました。手束先生は、一見こわもてな印象を受けましたが、悪には決して妥協せず、権力者にも立ち向かう強い信念を持っておられました。しかし同時に、公平で優しい方でした。入会当時、30歳そこそこの私にも、親切に接してくださいました。このお二人の偉大な指導者は、強い信念としなやかな優しさを兼ね備えておられ、そのような方々に導かれたことは、とても幸せな経験であり、私の牧師としての成長にも大きな影響を与えてくださいました。以前の私は、総会や委員会などの会議に参加しても、勇気がなく自分の意見を言う前に会の話題が次に移ってしまったりしました。しかし今は、賛成すべきことには賛成し、異なる意見を持っている時でも、堂々と発表できるようになりました。

＊＊＊

先日も、ある団体の会議で、戦後80周年の声明について話し合っていました。「私たちは、聖書を誤りなき神の言葉と信じて、次の声明を発表します」で始まり、政府を批判する声明を書いていましたが、その中には、ローマ13章1節でパウロが語った言葉が含まれていませんでした。質疑の時間に私が手を上げてその点を質問しますと、「その内容に関する要素は全く含まれていません」との回答でした。そこで、「聖書を誤りなき神の言葉と書くならば、ネロ皇帝の元でクリスチャンが迫害を受ける状況でも、パウロは反政府運動を呼びかけたのではなく、『上に立つ者に従いなさい』と語ったことには大きな意味があると思いますので、その一文を追加していただきたいです」と、修正動議を出しました。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」（ローマ13章1節）（ローマ人への手紙はＡＤ57～58年に執筆さ

（次頁につづく）

れ、ローマ帝国の5代目皇帝ネロの統治はＡＤ54～68年です。）

しかし、使徒たちが上に立つ者に従わなかった事例もあります。それは、サンヘドリン（ユダヤ議会）が「そこで、彼らは二人を呼んで、イエスの名によって語ることも教えることも、いっさいしてはならないと命じた」（使徒の働き4章18節）ことに対して、使徒ペテロと使徒ヨハネは、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません」（使徒の働き4章19～20節）と語ったところです。なぜなら「イエスの名によって語ることも教えることも、いっさいしてはならない」という命令は、公の説教だけではなく、個人伝道も含まれるからです。イエス様の大宣教命令を実行することを禁じられたような時には、相手が政治権力を持つ者であっても逆らわないわけにはいきません。

戦後80周年の節目の年に、キリスト教界が「平和を求めるメッセージ」を声明として発表することは素晴らしいことです。しかし、「人はみな、上に立つ権威に従うべきです」という基本姿勢を含まないならば、私はその声明には同意できないと思いました。

＊＊＊

使徒たちは、イエス様の大宣教命令に応えて、奇跡を行いながら福音を大胆に伝えていました。しかし、「全世界に出て行って福音を伝えること」（マルコ16章15節参照）はしていませんでした。当時のエルサレム教会は、2万人以上の信徒を有する教会でした（ペテロの一回目の説教で3千人が弟子に加えられ、ペテロの2回目の説教では5千人が信者になりました。この人数は成人男性しか含まれていませんので、女性や子どもを入れたら2万人以上になったはずです。）このエルサレム教会は、とても素晴らしく、評判が良く、次々に人が救われる教会でした。「神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださった。」（使徒の働き2章47節）しかし、恵まれ、居心地が良く快適だったからでしょう。みんな教会にとどまっていました。

これは、現代の教会においても同じ問題があります。「出て行って福音を伝えなさい」というイエス様の大宣教命令に従っている教会は多くはありません。イエス様は、大宣教命令に従わないエルサレム教会を世界宣教に遣わされました。

ステパノの殉教が起こり、同時に、エルサレム教会に対する激しい迫害が起こりました。その結果、エルサレム教会の信徒たちは、使徒たちを除いて、「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります」（使徒の働き1章8ｂ節）とあるように、世界宣教に遣わされました。彼らは、散らされながらも、そこで福音を伝えました。

聖書に従うのは、人間の努力ではありません。神の恵みです。神の恵みによって、神は、大宣教命令を行えるようにしてくださいます。そして、エルサレム教会を散らした迫害者サウロを、主は使徒パウロに変えて世界宣教に用いられました。日本の教会も、神の恵みによって、大宣教命令を行わせてくださると信じます。

＊＊＊

日本民族総福音化運動協議会は、日本の全国民の51％の福音化を第一の目標として掲げています。そんなとてつもなく大きな目標は、神の恵みによってしか行い得ません。しかし、神がそれをやってくださることに期待しています。そして、日本民族総福音化運動協議会を用いてくださることを祈ります。奥山先生は、世界宣教のビジョンに燃えていました。手束先生は、草の根運動で日本のクリスチャンが力を合わせて日本伝道をするビジョンに燃えていました。これらのビジョンは、神の恵みによってこれからも前進し、拡大していくと信じます。

現代は、偽教師、偽預言者がたくさん現れている時代です。中には、宗教多元主義を掲げる人もいます。つまり、「どの宗教にも救いがある」という考え方です。しかし聖書は、「イエス様以外に救いはない」と断言します。「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」（使徒の働き4章12節）この福音がもしも曲げられたとしたら、いくらキリスト教という宗教に人々が入会しても、確かな改心・回心がなければ、何の意味もありません。

行澤新代表理事の元で、ともに力を合わせていきましょう。この時代に日本の福音宣教のために日本民族総福音化運動協議会を立ち上げてくださったのは神ご自身です。私たち一人ひとりが、それぞれの場で福音を伝えることから始めましょう。ともに聖霊に満たされてイエス・キリストを日本中に、ひいては世界中に伝えていきましょう！

（連載）

創造論の基本的考え方 2

日本民族総福音化運動協議会　理事
レムナント出版　代表
久保　有政

「無からの創造をなされた神」

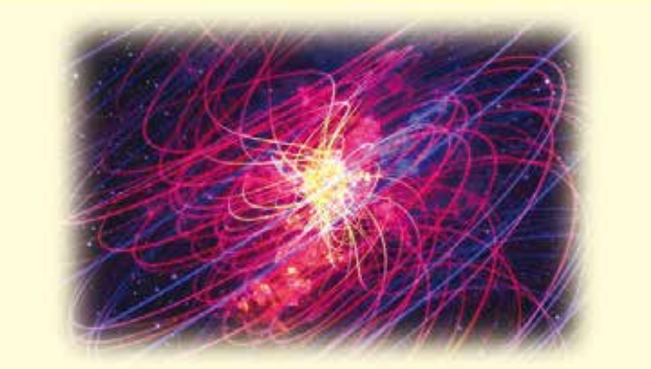
前回、今日の確かな科学的知識から見ても正しい「聖書中の記述」について見ました。

今回は、科学は時代と共に変わりながらも、しだいに聖書の記述内容に近づきつつある、ということを見たいと思います。

たとえば聖書には「無から有を呼び出される神」（ローマ4章17節）という御言葉があります。神は無から万物を創造する創造者だということです。

20世紀前半までは、科学者の間では、宇宙は永遠の昔から永遠の未来まで同じように続いていくのだろうという考えが主流でした。宇宙に始まりはないという考えです。

ところが最近の科学者は、宇宙には始まりがあったと考えています。さらには「無から始まった」と言うようになりました。



20世紀には量子論（量子力学）が登場しました。量子とは、電子や中性子、陽子やニュートリノ、クオークその他の素粒子などのことです。そうした素粒子は、私たちのこれまでの常識とは異なる不思議な動きや、出現の仕方をすることがわかりました。

また20世紀には、宇宙のビッグバン説や、インフレーション仮説などが登場しました。ビッグバン説とは、宇宙が爆発的に始まったという説、またインフレーション仮説とは急激な膨張をして宇宙が拡大したという説です。そして米国タフツ大学のアレキサンダー・ビレンキン博士は、「宇宙は、量子論的自由をもつ無から誕生した」と述べています。私たちは無というと、単に何もないものと思いがちです。しかし量子論では、無とか真空というものは、物質を生み出す可能性を秘めたものなのです。目に見えないエネルギーを持つことができるのです。「宇宙は、量子論的自由をもつ無から誕生した」という、この「量子論的自由をもつ無」ということをよく理解するには、量子論の知識が必要ですが、いずれにしても宇宙は無から有を呼び出す形で出現したというのです。

爆発的に膨張して、今日のような広大無辺の宇宙になっていきました。これは、空間の中で爆発が起こったという意味ではありません。空間と時間の連続体である宇宙自体が、爆発的に始まって、大きな広がりを持つようになったのです。

聖書にも、「天を造り出し、これを引き延べられた神なる主」（イザ42章5節）と記されています。宇宙は「引き延べられた」―つまり宇宙は無から誕生したのち、爆発的に膨張し、急激なインフレーションによって膨張して、大きな広がりを持つようになったと聖書は語っているようです。

もちろん、まだ幾つかの違いはあります。しかしそれでも、科学の説明が聖書に近づきつつあるのです。

20世紀には大科学者のアインシュタインが登場して、有名なE=mc2という式を見出しました。エネルギーは、質量に光速の2乗をかけたものであるということです。質量とは物のつまり具合を指します。

このE=mc2が意味するところを簡単に説明しますと、質量、また物質はエネルギーに変換できるということです。また逆にエネルギーは質量、物質に変換できるということでもあります。実際聖書は、「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない」（イザ40章26節）と述べています。ここに「この方は精力に満ち」とありますが、ある英語訳はこれを「この方はエネルギーに満ち」と訳しています。神はエネルギーに満ちた方なのです。

神はエネルギーを宇宙に注入して、そのエネルギーを物質に転換し、宇宙の中に様々な物質を創造していかれたわけです。聖書が冒頭で述べている通り、「はじめに神が天と地を創造した」（創世1章1節）のです。

連載 第6回

わたしの日本宣教論 ―― 徒然草

聖書と日本フォーラム
仙台舘（やかた）家の教会会員
佐藤　博

セカンドチャンス肯定論

編者注：本稿は大変チャレンジングな提言となっておりますが、今後、この点での議論が公平かつ建徳的に進むことを希望しております。なお、本稿は著者個人の意見を披瀝されたものであり、本会の意見を代表するものではありません。

ザビエルの失敗に学ぶ

セカンドチャンスとは

キリスト教でいうセカンドチャンスとは、死後の救いの可能性の事です。別言すれば「最後の福音」といっても過言ではありません。従ってサードチャンスはありません。

生涯「福音」に接する機会が無かった人々への恩寵であり、神の栄光の裏返しです（マタイ25章31～46節）。

幾多の魂が「約束の地」に入れるか否かという、のっぴきならない問題です。

ですからこれはクリスチャンの仕事ではなくイエスご自身による福音宣教、それがセカンドチャンスです。聖書的キリスト教のみが有するアドバンテージである事を、クリスチャンたちこそ、心すべきです。聖書を教える者たちが【セカンドチャンスいいですね、それがあれば苦労しません】などと揶揄し、「神の幼子」を混乱させてはなりません。

これが伝道なら、ダマスコ途上のサウロと同じです。パウロに習えという者が、サウロに習ってどうするのでしょう。

日本人の存在理由

明治六年のキリシタン禁令撤廃以降、未だ人口比一％未満という数は有り得ません。見つかれば磔という時に三％前後だったとすれば、余りにも不可解です。

神はセカンドチャンスを否定命題とする「キリスト教」など、そもそも由とされなかったのです（ヨハネ5章39～47節）。

ですからこれはリテラシーの問題であり、宣教論云々ではなかったのかも知れません。それが一向に噛み合わない議論であり、即ちサタンの欺瞞工作です。

私はセカンドチャンスの是非を巡る真の解決を、神は日本人キリスト者に託しておられるとしか思えないのです。

ザビエルも理解できなかったセカンドチャンス

イエズス会の宣教師ザビエルが、日本人に伝道する際に最も頭を悩ませたのがこの問題です。多くの者が口を揃えて聞きたがった疑問に、上手く答えられませんでした。

キリストを知らずに死んだ者は、一体どうなるのかという素朴な質問です。それに対し『もう手遅れです、地獄です』と答える他ありません。一六世紀のキリスト教とは、そんなものだったのです。それに対する日本人の側は、『ならば自分だけ天国に行く訳にはいかない。それにしても今頃やって来て、キリストを知らずに死んだ者も救えない神など信じるに足らない』と云うのが、一般的な答だったようです。

聖書を知らない日本人の『信仰告白』（マルコ12章28～31節）の方が、「イエスの心」に適っていたという訳です。

彼はマラッカで偶然出会ったヤジローの好印象もあり、期待しながら日本にやって来ました。他の異教徒たちとは何かが違うと、確かに感じたようです。

『神に大いなる感謝をささげる為に、ひとつ知っていただきたいのは、この島国は福音を受ける心構えができているということです』と記した報告書の第一報がそれです。

ところが「さに非ず」です。ザビエルの手には負えない程、期待を超えていたのです。『この島国』に到着するまでは聞いた事がない、先の質問攻めです。彼の説明では頑として納得しない日本人の神観、そしてうなじのこわさです。他者をおもんぱかっての質問に、ザビエルもタジタジです。

個人主義という西洋キリスト教の限界を体験する嵌めになりました。当初の期待も、『大いなる感謝』も何処へやらです。

日本人の心にヘブル的プロテスタンティズムを見抜いたザビエルの慧眼もさる事ながら、一抹の不安が脳裏をよぎったのは想像に難くありません。カトリックの宣教師が当時恐れていたのは仏教や神道ではなく、同業他社のプロテスタントです。先

を越されたかも、という不安です。そうでない事はすぐ判明しました。

残る可能性は一つです。日本人の口伝や記憶、文献の中には見当たりませんが日本人とは、もしや旧約聖書に記された「失われた十部族」の末裔ではないか、という思惑です。宣教師としての霊性です。

ザビエルは、実はスペイン人ではありません。日本語と同じ言語構造のバスク語という膠着語を母語とする、彼も出自不詳のバスク人であったという影響かも知れません。

しかし彼の使命はカトリックの版図拡大であり、その為の伝道です。ザビエルの霊性はそこまでした。永遠の救いに係わる問題、「最後の福音」を巡る日本人との信仰問答には辟易したとみえ、『日本人を侮ってはならない、彼らを説得できる有能な宣教師をもっと送れ』と嘆願書を送った後で、自分は日本人への伝道を諦めインドに向かったという話は有名です。

福音と宗教との確執

真の宗教とは永遠への憧れと自我に死ぬ事だとすれば、「キリストの福音」こそ、ユダヤ教、即ち律法主義という呪いからの解放であったという聖書の証に、異論はない筈です。

その「キリストの福音」を誰憚ることなく「私の福音」とまで公言したパウロ、その自死的宣言に他なりません。しかし心底神に仕えているつもりのパウロがその神に逆らい、律法主義の奴隷でしかなかったというパウロ自身の告白は重大です。自分の思想や信条に基づく行為を「上からのもの」と一心に思い込んでいたのです。いわゆる確信犯です。宗教に熱心な人が陥りやすい「認知バイアス」という思い込みです。それが形而上的偶像礼拝です。

【バカを言うな】というなかれ、世の宗教とは皆この類です。人の数だけ宗教があるとすれば人とは畢竟「自分教」という一神教の教祖であり、同時にもっとも忠良なる只一人の信者という意味です。原因は信仰と信心の混同、福音と宗教との同一視です。開眼前のパウロがそれだったのです。

『八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者であり、きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者』と自負するパウロでさえ、目測を誤ったのです。

ガマリエル門下の秀才サウロから「キリストの弟子」パウロへと至る『随神の道（カムナガラノミチ）』です。福音の語り部が必ず通る道です。

その時不可欠なのはガマリエル時代に習得した学識の内省と、聖霊による再吟味です。これが杜撰であれば肩書が定着した頃、かつての知ったかぶりが頭をもたげる事必定です。そこに個人主義という文化的影響が加われば、正気に戻るのは殆ど絶望的です。

セカンドチャンスの是非を巡る詭弁

さて、セカンドチャンスの「否定論」を三分間で熱弁する者が曰く、【セカンドチャンスは有りません。不信者は救われません。人は死んでも変わりません。イエスを信じなかった者は陰府、つまり地獄です。ですから神様に全部お委ね致しましょう】。

日本語かも知れませんが、中身は語義矛盾と出鱈目な推論だらけです。聖書解釈以前の話です。アメリカの神学校で学んだ方法論の受け売りに過ぎません。これは統計論理学に於けるデータ分析上の禁忌であり、相関関係に過ぎない出来事を全て因果関係だけで説明する時に生じる初歩的な、しかし致命的な判断ミスなのです（マタイ4章1～11節）。それが聖書から強引に否定論を演繹してしまった彼の推論ミスの経緯です。

【不信者は救われません】とはオカドチガイです。これは福音を知らずに死んだ「未信者」の問題です。【陰府、つまり地獄】とは何たる短絡、全く別の所です。イザナミが下った所も陰府（黄泉）であり、地獄などではありません。日本人の常識です。イエスも十字架の死後、三日間地獄に居たのではありません。

又【人は死んでも変わりません】とは異な事を、そもそも死んだ事のない者が言う言葉ではありません。我々が信じるべきは死んで蘇られたお方です。【地獄です】と断じたあとで【神様に全部お委ね致しましょう】と奨められたとしても神様は、はた迷惑な筈です。

思い込みという「事実誤認」に始まり、「因果関係を間違い」、「過剰な一般化」によって論点を失い、恣意的な解釈で「神の幼子」たちを更なる混乱へと誘導してはなりません。

【セカンドチャンスは有りません】から出発し、四の五の言いながら【やっぱり有りませんでした】という、堂々巡りの詭弁です。

私はこの否定論者に質問疑問反論と『セカンドチャンス肯定論』を送りましたが、返事がありません。

文脈無視という更なる詭弁

又セカンドチャンスを忌避する余り、これを「神聖な問題」と勝手に忖度し『コルバン』（マルコ7章1～13節）にしたがる者もいます。地に落とされた者共による目眩ましです。議論そのものをアンタッチャブルに出来れば、『我関せず』の方が謙遜に見えるからです。

しかしこれは排中律の問題です。肯定否定のどちらかが【嘘】なので

す。その当該箇所が、次です。

「信仰による義はこう言います。『あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない。』それはキリストを引き降ろすことです。また、『だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけない。』それはキリストを死者の中から引き上げることです」（ローマ10章6～7節）。

西洋神学の定説と逆の教義を説けば「自分たちの義」が立たないとして、「神の義」を捨てたのです。

『だれが天に、だれが地の奥底に』の箇所は異邦人の「信仰による義」とイスラエルが追及した「行いによる義」を対比させたパウロの福音理解であり、セカンドチャンスへの緘口令ではありません。

福音を捻じ曲げ、聖書の文脈を無視し、「最後の福音」を否定命題としたいのなら、最早「サタンの弟子」という他ありません。

今や世界中のキリスト教会に蔓延してしまった【世紀の大嘘】、その峻別作業こそ、我々の使命ではなかったでしょうか。

それにしても、異邦人が四世紀にキリスト教を国教化した為に「失われた福音」、それが「イスラエルの家の滅びた羊」（マタイ15章24節）の末裔らによって再発見され、『セカンドチャンスの福音』として伏線回収されようとは、何という神の配剤だったのでしょうか（コリント12章5～10節）。

栄光在主

バルナバ牧師の一言「代表理事就任の所信表明」

シャローム！「日本民族総福音化運動協議会」賛同者のみなさまには、いつも日本の民族的な祝福と救いをお祈りいただいていますことを心から感謝しています。

私は、今般、民福協の総裁改め代表理事に就任いたしました、レハイム・キリスト教会牧師の行澤でございます。偉大なビジョンの人であった手束正昭先生の後任としてはまこと器不足であり、また手束先生と同じことをすることも到底かなわないのですが、キリストによる日本民族の真の復興を求める手束先生の情熱に親しく接してきた者の一人として、その幻をとにかく受け継いでいかなければという思いだけで、大任をお引き受けしたような次第です。何とも心もとない限りですが、民福協の掲げるビジョンを一歩でも実現に至らせるべく、皆さんと共に労していきたいと思っています。なにとぞご加祷、ご助力賜りますようお願い申し上げます。

代表理事として、私が今もっとも民福協に求められていると考えますのは、真の意味で「イエスはキリストである」と告白し、日本の霊的復興を切に願う者が、分け隔てなく、また偏りなく結集できるような「場」となることであると考えております。

クリスチャンの一致こそ力であり、キリストの切なる願いであるということはみな良く理解しています（ヨハネ17：21－23）。

しかし、それが現実にはほとんど機能していないこともまた事実です。それは、等しく日本のリバイバルを求めるクリスチャンであっても、その方法論、表現方法、その基礎となる神学、世界観、価値観がそれぞれ異なっているのが通常ですが、その相違が互いを受け入れ、一つとなることを妨げるものにもなっているからです。特に、日本人の「純粋なものを尊ぶ」という気質もそこに関係しているのかもしれません。

しかし、一致はキリストの祈りであり、また願いです。そのためには、自分とは異質と思える要素であってもお互いに忍耐強く理解するための努力を惜しまず、安易な妥協ではなく、むしろ相互の尊敬を基調とした対話と祈りをあくまで求め続けていく霊的態度が必要であると考えます。

自分の信仰的確信に立脚しつつ、しかし自分こそ正しいと決めつけず、むしろ「へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者」（ピリピ2：3）と考え、裁かず、無視せず、かえって主にある兄弟として認めていく姿勢が求められていると思うのです。

もちろん異端に対しては明確な線を引くべきであり、妥協などあり得ません。そして、そのためには、使徒的教会の基礎をなす「使徒信条」が一致の結集点として機能すべきと理解しています。ただ実際のケースでは、十分かつ慎重な吟味・審査を経ずに、ただ主流派の価値観や神学、規範等にそぐわないという理由だけで、クリスチャンのあるものが異端視され、排除されるというケースが見られるように思われるのは残念なことです。

公正と正義（実体的正義及び手続的正義）を重んじる弟子たちの共同体によって、聖霊と祈りにおいて運営される会議体が今求められている所以です。もちろん、そこでは基本的人権と法の支配（それ自体が聖書の価値観である）が尊重されるべきなのは言うまでもありません。

日本の民族的救いを真摯に求めるクリスチャンが等しい資格において結集し、祈り、発言し、そこから何かが御霊によって生みだされていくことを夢見ています。ぜひとも皆さんの忌憚のないご意見、ご提言をお待ちしております。一つとなっていきましょう！

行澤　一人

*なお「バルナバ牧師の一言」は、毎月一回程度、皆様にメールで発信していければと願っています。祈っていてください。

報告

Jesus 2025 June Festival

今こそ、教会に与えられた役割がある！

日本民族総福音化運動協議会
理事・東京ブロック長
新宿福興教会牧師
ジーザス・ジューン・フェスティバル2025実行委員長
菅野　直基

今年も、ジーザス・ジューン・フェスティバルを東京で開催しました。ジーザス・ジューン・フェスティバルは、私たち「日本民族総福音化運動協議会実行委員会」が主催で行われていますが、今回で22回目になります。

去る２０２５年６月12日(木)に、東京都新宿区にある単立東京中央教会において「ジーザス・ジューン・フェスティバル２０２５」が開催されました。会場の東京中央教会には、50名を超える熱心な賛同者やクリスチャンが集まりました。

司会と会衆賛美リードは、理事・東京ブロック長・新宿福興教会牧師の菅野がさせていただきました。講師に、参議院議員・グッド・サマリタン・チャーチ牧師の金子道仁氏をお迎えして、「教育改革と日本のリバイバル」という演題で講演をしていただきました。

現在、政界が旧統一教会を巡る問題で揺れる中、教会の公益性について深く考えさせられます。そのような状況の中で、各地域に建てられている教会が、それぞれの地域でかけがえのない存在であることを願っています。明治時代には、キリスト教の学校が日本の教育の発展や近代化にとって重要な役割を果たしてきました。令和時代の現在においても、教会が、教育や社会の危機に対して役割を果たし、期待に応えることができると確信しています。

金子氏自身は牧師ですが、そこから政界に遣わされるきっかけになったのは、旧約聖書のイザヤ書58章12節の聖句であったと証しされます。

「あなたのうちのある者は、昔の廃墟を建て直し、あなたは代々にわたる礎を築き直し、『破れを繕う者、通りを住めるように回復する者』と呼ばれる。」(イザヤ58章12節)

今の日本にとっての「昔の廃墟」や「代々にわたる礎」は、「地方の過疎化」や「国の少子高齢化問題」ですが、主は、その問題を解決してくださる希望を持っておられます。

金子氏が掲げる「地方創生の鍵」は次の３つです。①「教育機会の確保」②「福祉(医療・介護)の充実」③「なりわいの回復」です。つまり、人は、「子育てができて、医療や介護などの福祉が充実し、仕事があって食べていけるなら、安心して暮らすことができる。」ということです。しかし、このような基本的な事が、地方では崩れかけているのです。

金子氏自身は日本維新の会の議員ですが、「自民党・公明党・日本維新の会が掲げる高校の授業料無償化を巡る３党協議」の実務者として話し合いに関わりながら、地方における高校教育の役割についての気づきがあり、教会こそがそれを担えると確信しました。それは、非営利の通信制高校の運営です。キリスト教会は日本全国にあり、各教会には建物があります。その建物に、学校に通えなくなった生徒たちの居場所を作り、教育の場を提供するならば、教会がニーズに応えることができ、かけがえのないありがたい存在として輝くはずです。また、通信制高校の数が増え、生徒数が増える中で、学校の質の低下の問題があります。それに対しても、教会は大きな役割を果たせるのではないかと提案しました。

教育において、その根幹にあり、一番大切な部分は、「愛を持って生徒を受け入れること、忍耐を持って励まし続け、希望を語り続けること。」ではないでしょうか。これは、教会が持つ福音のメッセージと相通じるものがあり、教会こそが行えるものです。

一つ目の「教育改革」と共に、「福祉の充実」と「なりわいの回復」についても、教会が持っている信仰と希望と愛によって、それらの問題を解決できるはずです。主からの知恵が与えられ、必ず必要な協力者が与えられていくはずです。そのために祈りましょう。

「あなたの口を大きく開けよ。わたしがそれを満たそう。」(詩篇81篇10ｂ)を引用しました。

「社会が傷んでいる今の時代だからこそ、主からのビジョンを受け取り、それを共有し、共に力を合わせて働き、主の栄光を見る者とならせていただきたい」と結ばれました。

「ジーザス・ジューン・フェスティバル２０２５」に参加してくださった方々に心から感謝を申し上げます。これからも、毎年続けて開催していきますので、ご参加をよろしくお願いいたします。